

国債市場でバブルが起きていのではないだろうか。現在の国債の市場価格の異常な高さ、あるいは異常な国債金利の低さがそれである。

そもそもバブルとは何だろうか。経済学的には、短期・中期には資産が合理的な動きになっているように見えて、長期的に持続不可能な経路に資産価格が乗ってしまっている状況である。

たとえば一九八〇年代後半の日本の不動産バブルは、当時は次のように理解されていた。不動産価格はたしかに高いが不動産価格は上昇を続けている。だから不動産に投資しても十分



伊藤元重の

ニュースな見方

に収益を上げることができ、というものだ。この限る、というものは、不動産価格の異常な高さ、あるいは異常な国債金利の低さがそれである。しかも、そうしているうちに、彼らがなぜ超長期の国債を運用をしながらはいるのか、という点に疑問を抱く。彼らはなぜ超長期の国債を運用をしながらはいるのか、という点に疑問を抱く。彼らはなぜ超長期の国債を運用をしながらはいるのか、という点に疑問を抱く。

当然いずれ破裂する

資先はないので、20年という長い国債を購入するといふことになるのだ。さて国債バブルであるが、ここに来て、長期国債の利回りがさらに下がってきている。生命保険会社や銀行などは、積極的に20年超長期の国債を積むことになる。その理由は、超長期の国債が都合がよいというのだ。政府の財政は赤字を垂れ流し続け、政府債務はいくらでも増え続け

大半は引き出されずに銀行の中に滞留している。だから、実質的には長期債務と問題はない。超長期の国債が都合がよいというのだ。政府の財政は赤字を垂れ流し続け、政府債務はいくらでも増え続け

財政支える国債のバブル

超長期の運用をしなればならない資金が潤沢にあるのだ。また、近い将来にインフレが起きて資産価値が暴落したり、金利が急騰したり返復をしないのか。難しいことではあるが、日本の財政状況や国債価格が分散の経路に乗っていることは明らかだろう。このままの状況を続けていけば、どこかでバブルの破裂が起きると考えるのが常識的である。

*この記事・写真等は日経新聞社の許諾を得て転載しています。

(東大大学院 経済学研究所教授)